

## 詩書訓詁の一類型

頼 惟 勤

### 一 はじめに

現行の古典の注釈書においても見られるとおり、多くの場合、注釈としてはまず語釈が不可欠である、しかし難解な本文に対しては、通釈もまた必要である。またこれとは別に、専ら通読されることを目的とした翻訳もしばしば行われる。もしもこの翻訳が原文に極めて忠実な逐語訳であるならば、これまた通釈の代用となるわけである。以下において取り上げようとする対象は、経書としての詩書（つまり『詩経』と『書経』）について、後人が加えた多くの訓注のうち、通釈あるいは逐語訳に相当するものである。なお、文字を置き換えただけのものも、最も広義における逐語訳と考えて、ここで取り上げる対象とする。

孔子が六経を整序したと言われる時代、例えば「鄭聲の雅樂を亂るを惡む」（『論語』陽貨篇）というような表現を通じて、鄭風の詩が訓詁注釈を待たずに直覺的に會得されていたことが知られる。また「堯の曰く、咨、爾舜」云々も特に注解を加えることなく「寛なれば則ち衆を得」云々に直接する（堯曰篇）。このように、当時の問題点は、六経の訓詁ではなく、義理の闡明であったことは明かである、その故に、陪臣が天子の礼を用いることへの非難（八佾篇）、諒陰三年の間の政治の実際（憲問篇）などが自然に口に上ったのであろう。しかしまた「（詩によって）多く鳥獸草木の名を識る」

(陽貨篇) という以上は、ありふれた日常の知識を超えて、詩を通じて学ばれる動植物が増加して来ていることも推測される。武王の乱臣十人が実は九人であるという説明(泰伯篇)、周の八士の列挙(微子篇)なども、周初の文献に対して何がしかの注釈が要することもあった象徴とすることができよう。以上はすべて『論語』が孔子存命中の事実を伝えているとしての話であるが、ここで述べようとするのは、詩書に対して、語釈も必要としない時代から、次第に語釈ぐらいは時に必要とする時代というものが続き、それが今の『論語』を通じて知られる、ということである。

六経成立後、時間的な距りが増すにつれて、使われている語彙のみならず、言い廻しに変化が生じ、文字の品詞の使用法にも異同が生ずるのは当然のことである。こうなると、語釈だけでは済まなくなる。卑近な譬えで言うならば、単語帳はできたが文意が取れぬという事態が広々にして発生する。ここにおいて上述のいわゆる通釈(または逐語訳)が必要となる次第である。

上例は専ら『論語』から取ったので、以下は『孟子』から取ることにする。戦国の孟子の時代になっても、六経に対する難易の度がさして変化したようにも思われない。かなり多数に上る詩書の引用は、いずれも自明のものとして提示されている。例えば「祇載見瞽瞍。夔夔齊栗。瞽瞍亦允若」(萬章篇上)。「舜」事を敬みて瞽瞍に見ゆ。莊敬にして戦慄すれば、瞽瞍もまた信とし順へり。)は語彙的にはかなり古風と思われるが、孟子はこれを引いて「是れ父(瞽瞍)、「舜を」得て子とせずと爲すなり」と言うだけである。また例えば、小弁(小雅)は小人の詩なり」という説に対して「凱風」(邶風)を引く答問の際(告子篇下)も、すべて詩そのものは既知のこととしている。しかし稀には書を引いて「涪水、余を警む」としたあと、「涪水とは洪水なり」という語釈をつけた例(滕文公篇下)、あるいは「匪厥玄黄」(其の玄黄「の帛」を籠にす)のあとに、「其君子。實玄黄于匪。以迎其君子。其小人。簞食壺漿。以迎其小人」(其の君子は玄黄を籠に實て、以て其の君子を迎へ、其の小人は簞食壺漿して、以て其の小人を迎ふ)と敷衍している例(同上)などは、後代の訓詁の先触れと

することができる。(傍点。は対応する文字。以下同様。)

## 二書

書(すなわち『書経』、『尚書』)においては、もしも本稿のような立場を取り、文字の置き換えまでを対象の中に含めると、いわゆる今古文の文字の相違までがその中に含まれることとなる。しかしそれは明かに考察の範囲を超えるもので、ここでは触れないこととする。ただし、現行の『古文尚書』と、『史記』との対比は、単純に今古文の相違とのみ言えない性格を持つと考え、(つまり『史記』が尚書を書き変えて文章を平易化した可能性があると認め、)大綱を指摘しておく。詳しくは孫星衍『尚書今古文注疏』に就いて知ることができる。

### △現行の『古文尚書』▽

堯典・舜典

皋陶謨・益稷・禹貢・甘誓

湯誓・高宗彤日・西伯戡黎

微子・洪範

牧誓・呂刑

金縢・無逸・多士・費誓

君奭

秦誓

文侯之命

### △『史記』▽

五帝本紀

夏本紀

殷本紀

宋世家

周本紀

魯世家

燕世家

秦本紀

晉世家

次にその一例を掲げる。(文字の対応を示す。ここでは省き、異同のある文字にだけ特に・を施す。)

『牧誓』今予發。惟恭行天之罰、今日之事、不愆于六歩七歩、乃此齊焉。夫子勛哉。不愆于四伐五伐六伐七伐乃止齊焉。勛哉夫子。

『周本紀』今予發。維共行天之罰。今日之事。不過六歩七歩。乃止齊焉。夫子勛哉。不過於四伐五伐六伐七伐乃止齊焉。勛哉夫子。(今、予れ發、惟れ恭しく「或は、共に」天の罰を行ふ。今日の事、六歩・七歩をすぎずして、乃ち止り齊しうせよ。夫子、つとめよや。四伐・五伐・六伐・七伐をすぎずして、乃ち止り齊しうせよ。つとめよや夫子。)

なお、『史記』のついでに『漢書』を一瞥するならば、例えば律曆志における「泰誓」・「武成」の引用の如く、既に『史記』の場合とは違い、固定した『尚書』を引用する立場を取る。(一般にこれらの志は前漢までの沿革を説くので、『尚書』からの引用が篇初に冠せられることが多い。)ただ上述の『史記』の場合と似るのは、翟方進伝に引かれるいわゆる「莽誥」で、これは「大誥」の文字を適宜に置き換えたものを骨格とするものである。(傍点は前例どおり。)

『大誥』嗚呼。天明畏。弼我不丕基。王曰、爾惟舊人。爾丕克遠省。爾知寧王若勤哉。

『莽誥』烏庠。天明畏。輔漢始而大大矣。爾有惟舊人泉陵侯之言。爾不克遠省。爾豈知太皇太后若此勤哉。(大意は後掲参照。)

尚書の鄭玄の注は全面的に見ることはできないが、袁均の『鄭氏佚書』の輯佚による限りでは語釈が主である。ただし、例えば「堯典」の「汝能庸命翼朕位」(汝、能く命を用ふれば我が位に入れん)に対して「汝諸侯之中。有能順事用天命者。入處我位統治天子之事者乎」(汝、諸侯の中に能く事に順ひ天命を用ふる者あらば、我が位に入處し、天子の事を統治する者ならんか。『史記』五帝本紀、集解に引く)とするのは、通釈的な敷衍の注である。(傍点。は対応する文字。)

この型の注としてかなりなまでに整っているのは、いわゆる「偽孔伝」である。以下その例を随意に取り出すことと

する。(以下、敷衍の注が施されているのは、それ自身が解釈であるから、書き下し文を省略する。なお、文字の対応を示す。・は適宜その場に適しいと思われる方法で施す。)

〔經〕惟二月既望、越六日乙未。王朝步自周。則至于豐。惟太保先周公相宅。

〔傳〕周公攝政七年二月十五日。日月相望、因紀之。於已望後六日。二十一日。成王朝行從鎬京、則至于豐。以遷都之事告文王廟。告文王則告武王可知。以祖見考。太保三公官名。召公也。召公於周公前相視洛居。周公後往。

右は「召誥」のはじめの部分であるが、これら佶屈聱牙な經文の箇処には、例外なくこのような敷衍の注が通釈として施されている。前掲「大誥」については次のとおりである。

〔傳〕歎天之明德可畏。輔成我大大之基業。言卜不可違也。特命久老之人。知文王故事者。大能遠省識古事。汝知文。王若彼之勤勞哉。目所親見。法之又明。』

伝の成立後、疏(『尚書正義』)が作られ、經について、伝を参考しつつ、更に懇切な敷衍を行う。例えば「洛誥」では次のようである。(經には傍点をつけない。傳の「」は当面問題外のところ。なお吉川吉次郎訳『尚書正義』第三冊〔昭一六刊〕四六三ページ以下参照。)

〔洛誥〕

〔傳〕

〔周公至明辟 正義曰〕

周公拜手稽首

周公盡禮致敬

周公將反歸政 陳成王將居其位  
周公拜手稽首 盡禮致敬於王

曰

言

既拜乃興而言曰

朕復子明辟

我復還明君之政於子

我今復還子明君之政

〔子成王年二十成人 故必歸政而退老〕

王如

弗敢及天基命定命

予乃胤保

大相東土

其基作民明辟

予惟乙卯

朝至于洛師

我卜河朔黎水

我乃卜澗水東澧水

西 惟洛食

我亦卜澧水東

亦惟洛食

〔如往也〕言王往日幼少

不。敢。及。知。天。始。命。周。家。安。定。天。下。之。命。

故已攝

我。乃。繼。文。武。安。天。下。之。道

大。相。洛。邑

其。始。為。民。明。君。之。治

〔致政在冬 本其春來〕

至。洛。衆。〔說始卜定都之意〕

我。使。人。卜。河。北。黎。水。上。不。吉

又。卜。澗。水。之。間。南。近。洛。吉〔今河南城也〕

〔卜必先墨畫龜 然後灼之〕兆順食墨

〔今洛陽也 將定下都 遷殷頑民 故并卜之〕

言王往日幼少 其志意未成

不。敢。及。知。天。之。始。命。我。周。家。安。定。天。下。之。命。

故我攝王之位 代王為治

我。乃。繼。文。武。王。安。定。天。下。之。道

以。此。故。大。視。東。土。洛。邑。之。居

其。始。欲。王。居。之。為。民。明。君。之。治

言欲為民明君 必當治於土中 故為王營洛邑也

〔予惟至獻卜 正義曰〕

周公追述立東都之事

我。惟。七。年。三。月。乙。卯。之。日

朝。至。於。洛。邑。衆。作。之。處。經。營。此。都

其未往之前 我使人卜河北黎水之上 不得吉兆

乃。卜。澗。水。東。澧。水。西

惟。近。洛。而。其。兆。得。吉。依。規。食。墨

我。亦。使。人。卜。澧。水。東

亦。惟。近。洛。其。兆。亦。吉。依。規。食。墨

我以乙卯至洛

伴來以圖及獻ト

遣使以所卜地圖。及獻所卜吉兆  
來告成王

我即使人來以所卜地圖。及獻所卜吉兆於王  
言卜吉立此都。王宜居之爲治也

### 三 詩

詩（すなわち『詩經』、『毛詩』）においては、まず材料は毛伝から若干のものが拾い出される。例えば「天作」（周頌）の「天作高山。大王荒之。彼作矣」について、毛伝は「作生。荒大也。天生萬物於高山。大王行道、能安天之所作也」という。この毛伝について、段玉裁の『毛詩故訓伝定本小箋』では、「大王行道」の次に「能大之文王又」の六字を補い、「……大王行道。能大之。文王又能安天之所作也」とすべしというが、陳奐の『詩毛氏伝疏』では、伝の「安」の字は「大」の誤りであるという。陳奐に従うと、この伝は「作生」「荒大」の語釈のあと、「天生萬物於高山。大王行道。能大天之所作也」という通釈的な敷衍の注が続いていることとなる。更に一例を追加するならば、「文王」（大雅）第六章の「永言配命。自求多福」について、伝では「永長。言我也」の語釈あと「我長配天命而行。爾庶國亦當自求多福」の通釈が続いている。

鄭箋になると、敷衍の注はかなり多くなる。例えば「清廟」（周頌）の「於穆清廟。肅雝顯相」については、まず毛伝として「於歎辭也。穆美。肅敬。雝和。相助也」があることを前提として、鄭箋としては「顯光也、見也」を補い、その上で「於乎美哉、周公之祭清廟也。其禮儀敬且和。又諸侯有光明著見之德者來助祭」と言う。

この例は毛鄭に異同がないか、異同があってもそれが本質的なものでなく、毛鄭を綜合できる場合である。これに対して、毛鄭に本質的な相違がある時は、もちろん鄭は鄭としての解釈を施す。例えば「玄鳥」（高頌）の「天命玄鳥。降而生商」について鄭箋は「降下也。天使馭下而生商者、謂馭遺卵。娥氏之女簡狄吞之而生契」という。これは一応、直訳

をして、更に「謂」(……を謂ふ)の形で解説したものである。ちなみに毛伝は春分に馭が空から降りて来る日に郊禱の神に夫と共に祈って子の契を生んだ、とするもので、鄭箋とは解釈が本質的に異なる。

次は疏(『毛詩正義』)であるが、既に毛伝と鄭箋とが時に訓詁を異にする上に更に通釈を加えようとするのであるから、その文面は複雑になる。

疏の通例としては、通釈は章ごとに施される。ただ例外としては「菜蘋」(召南。三章)は「三章勢連。須通解之也」と言い、一括して通釈している。また「伐木」(小雅。六章)は第五章・第六章を通して通釈している。(これはこの部分だけについては、全体を三章とする朱子の『詩集傳』の扱い方と同じである。)もちろん、章の意味が前章と重複していたり、語釈だけで十分であるような時には、通釈は省かれている。

疏の通釈は、毛伝・鄭箋で異なる時は「正義曰」で始まる。しかし、毛鄭で説を異にする場合は、「毛以爲」(毛おもへらく)で始め、あとに鄭説の異なるところを附記する。附記の表現は必ずしも形式的に固定はしていないが、しばしば、「鄭唯以……爲異。餘同」(鄭はただ、……を以て異なれりとなす。餘は「毛と」同じ。)という表現が採られる。しかし、鄭箋が既に委曲を悉しているような時には、「桑扈」(小雅)第二、二章の場合のように、殊更に疏としての説明をせず、「鄭義具箋」のような簡単な表現で済ませてしまうこともある。(この種のものはお「早麓」(大雅)第三章、靈臺(同)第四章、「天作」(周頌)などにおいてもあり、時に散見する。)いずれにしても、毛鄭が説を異にしている場合は、標準的な意味がつけられないので、「正義曰」と言うわけに行かないのは頷かれる。

以下、疏の例としては「生民」(大雅)首章第三分段を挙げることにする。「箋A」は箋のうちの語釈部分、「箋B」は通釈部分、「疏・毛」は特に毛鄭同説の部分の疏をも同欄に列ねておく。「箋B」と「疏・毛」「疏・鄭」には、経に該当する文字に。を施す。これによって、疏の敷衍が経について克明であること、そして伝・箋の文字をも取り込もうと



〔傳〕

履踐也

帝高辛氏之帝

也

武迹

敏疾也

從於帝

而見于天

將事齊敏也

歆饗

介大也

止福祿所止也

載

〔箋A〕

帝上帝也

敏拇也

介左右也

〔箋B〕

祀郊禘之時

時則有大神之

迹

姜嫄履之

足不能滿

履其拇指之處

心體歆歆然

其左右所止住

如有人道

感己者也

於是遂有身。

〔疏·毛〕

禋祀郊禘之時

其夫高辛氏帝

率與俱行

姜嫄隨帝之後

踐履帝迹

行事敬而敏疾

故為神歆饗

神即饗其祭

則愛而祐之

於是

為天神所美大

為福祿所依止

即得懷任

〔疏·鄭〕

鄭唯履帝以下三句

為異其首尾則同

言當祀郊禘之時

則有上帝大神之迹

姜嫄因祭見之

遂履此帝迹拇指之

處

而足不能滿

時即心體歆歆然

如有物所在身之

左右

所止住於身中

如有人道精氣之

感己者也

於是則震動而有身

時 維 后 稷

載 生 載 育

震 載 夙

震動也

夙早

育長也

后稷播百穀  
以利民

夙之言肅也

而肅戒不復御

後則生子

而養長

名之曰棄

舜臣堯而舉之

是為后稷

即震動而有身

祭則蒙祐獲福之

夙早

終人道則生之

既生之則長養之

及成人有德

為舜所舉用

掌種百穀

以利益下民

維為后稷矣

本其初生

故謂之生民

民則人所不識

后稷是顯見之號

故言是維后稷

以結之

則肅戒不復御

餘同

していることなどが、概見されるであろう。(以上、二・三節は単疏および四部叢刊本を校正して用いる。)

#### 四 おわりに

経文の文字によりながらそれを敷衍して通釈して行く型は、疏に至って完成したと思われる。その敷衍は誠に巧妙であるが、その際、伝、あるいは箋の語釈は存分に活用される。例えば「生民」の「弗」について、伝は「去也」と言い、箋の語釈は「弗之言祓也」と言い、その通釈は「祓去」と延ばしたのに応じ、疏は「除去」の二字をこれに当てている。また経文の「育」について、伝は「長也」と言い、箋の通釈は「養長」と延ばしたのに応じ、疏では「長養之」とする。(「之」が補われることによって、元來の經の「育」が動詞であることがはっきりする。)また「洛誥」の「大相東土」について、箋がこれを「大相洛邑」と言い変えたのを承け、疏は「以此故大視東土洛邑之居」と延ばし、「以此故」「之居」を補って文脈を明瞭ならしめる。このこの疏の「東土洛邑」は経伝を接続したものであるが、「生民」疏の「乃由姜嫄能禋敬」の「禋敬」(禋敬す、という動詞)は、經の「禋」と伝の「禋敬」(禋)は「敬」なり、という語釈)とを接続したもので、この種の連接によって、語義は極めてよく安定する。更にこのような逐語訳で意が尽くせない時には、「言」「謂」(つまりこれは……のことである)、の意)を用いて、やや自由に(原文とは離れた言い廻しによって)説明を加える。

このように、疏が経を通釈して行くいわゆる「経疏」の部分は、疏の文字を、経・伝・箋(書の場合には経・傳)と彼此対照させる手間さえかけるならば、極めて読解しやすい。この際、経・伝・箋には和刻の訓点があるので、(本来の疏のあり方とは逆に)経・伝・箋の語法関係を先に知っておいて疏に臨むことができる。そこで従来からも言われているように、経疏は無点本への「恐怖心」を取り払い、読書力の自信と実力とをつける恰好の教本となる。経疏だけを抜粋したテキストの実現が望まれる所以である。

その教本作りの準備の意味もあって、詩の経疏の所在に関するデータを載せた初歩的なプログラムを紹介したいと思う。これは結局、件数は限られている（詩三〇五篇）が、一件一件の中の項数が不齊一なもの（各篇は一章から十六章まであって不定）の処理に悩んだあげくの答案として見ていただきたい。データの「#」以下を入れ換えることによって、詩に関するデータ処理に若干の応用がきくことと思う。漢字が入っていないことから明かなとおり、使用機は初級練習用のものであるが、それでもなお、かなり面倒な作業を、素早く代行して呉れる機能を備えている。

中国の学問分野を「経史子集」と分類した場合、「経」の分野は原資料（つまり経書）が限られていて増加することがない。その限られた原資料に附随する資料（つまり経学の書）は無限と言ってよいほど存在する。資料のこのような性格は機械処理に適しい分野と言えよう。つまりそれぞれの研究者が、あらかじめ用意された原資料の枠取りに対して、自己の必要とするデータを入れて行けばよいからである。このような意味で、近い将来、漢字を自由に使用できる機種による経学研究用の基礎的プログラムが続々と試作され、公開・供用される日が来るであろうことを期待する。

（本稿は拙稿「中国における文献学の成立過程」(「お茶の水女子大学附属高校紀要二六、一九五六年」の続稿に当る。)

## sd41dへの注

Z=1: 古注, Z=2: 新注      B1\$ 詩篇名・撰者 (声調)      B2\$ 同・日本よみ      C\$ 風什 (data の#前3  
 字のうちの前2字)      C1\$ 章 (data#の直前の1字)      data# まで(は)1.120 gsub 300      data# 以下(は)  
 1.140 gsub 1000, 経疏の状況を次の3種に分け, その章をA9で示す.      1.1500 台 正義 (毛・鄭同説)      1.1600  
 台 毛・鄭 (毛・鄭異説)      1.1700 台 無疏文 (経疏なし)      使用機 PC6001+PC6006 (NEC)

```
10 REM sd41f
20 CLEAR 700
30 DIM A$(305),A1$(37)
50 INPUT"N=0=-3";N
60 PRINT#N,"sd41 fabiaoyong":PRINT#N,""
70 INPUT"Q & R(1^305)";Q,R
80 INPUT"Z=1(gu)=2(xin)";Z
100 GOSUB 10000
110 FOR I=Q TO R
120 B#=A$(I)
130 GOSUB 300
140 PRINT#N,I;TAB(5);B1#;TAB(32);B2#;
150 PRINT#N,TAB(45);C#;TAB(55);C1#;" zhang"
160 IF Z=2 THEN GOTO 180
170 GOSUB 1000
180 NEXT I
190 END
300 FOR J=1 TO 50
310 IF MID$(B#,J,1)=">" THEN GOSUB 800
320 NEXT J
330 B1#=LEFT$(B#,J1)
400 FOR J=1 TO 50
410 IF MID$(B#,J,1)="*" THEN GOSUB 800
420 IF MID$(B#,J,1)="@" THEN GOSUB 800
430 IF MID$(B#,J,1)="#" THEN GOSUB 800
440 NEXT J
450 B2#=LEFT$(B#,J1-1)
460 B2=LEN(B2#):B1=LEN(B1#):B3=B2-B1
470 B2#=RIGHT$(B2#,B3)
500 FOR J=1 TO 50
510 IF MID$(B#,J,1)="#" THEN GOSUB 800
520 NEXT J
530 B3#=LEFT$(B#,J1-1)
540 C#=LEFT$(RIGHT$(B3#,3),2)
550 C=VAL(C#)-50:C#=A1$(C)
560 C1#=RIGHT$(B3#,1):GOSUB 900
790 RETURN
800 J1=J:J=50:RETURN
900 IF C1#="A" THEN C1#="10":RETURN
910 IF C1#="B" THEN C1#="11":RETURN
920 IF C1#="C" THEN C1#="12":RETURN
930 IF C1#="D" THEN C1#="13":RETURN
940 IF C1#="E" THEN C1#="14":RETURN
950 IF C1#="F" THEN C1#="15":RETURN
960 IF C1#="G" THEN C1#="16":RETURN
970 RETURN
```

```

1000 B=LEN(B$):B4=B-B2-5
1010 D$=RIGHT$(B$,B4)
1020 FOR J=1 TO 30
1030 IF MID$(D$,J,1)="*" THEN GOSUB 800
1040 NEXT J
1050 D1$=LEFT$(D$,J1-1)
1100 D=LEN(D$):D1=LEN(D1$)
1120 D2$=RIGHT$(D$,D-D1-1):D2=LEN(D2$)
1130 FOR J=1 TO 30
1140 IF MID$(D2$,J,1)="*" THEN GOSUB 800
1150 NEXT J
1160 D3$=LEFT$(D2$,J1-1):D3=LEN(D3$)
1170 D4$=RIGHT$(D2$,D2-D3-1):D4=LEN(D4$)
1180 D5$=LEFT$(D4$,D4-1)
1500 PRINT #N," Zheng yi:";
1510 FOR K=1 TO 10
1520 A9$=MID$(D1$,K,1)
1530 IF A9$="" THEN K=10:GOTO 1580
1540 A9=ASC(A9$)
1550 IF A9>64 THEN A9=A9-7
1560 A9=A9-48
1570 PRINT #N, A9;
1580 NEXT K:PRINT #N,""
1600 PRINT #N," Mao/Zheng:";
1610 FOR K=1 TO 10
1620 A9$=MID$(D3$,K,1)
1630 IF A9$="" THEN K=10:GOTO 1680
1640 A9=ASC(A9$)
1650 IF A9>64 THEN A9=A9-7
1660 A9=A9-48
1670 PRINT #N, A9;
1680 NEXT K:PRINT #N,""
1700 PRINT #N," Wu Shuwen:";
1710 FOR K=1 TO 10
1720 A9$=MID$(D5$,K,1)
1730 IF A9$="" THEN K=10:GOTO 1780
1740 A9=ASC(A9$)
1750 IF A9>64 THEN A9=A9-7
1760 A9=A9-48
1770 PRINT #N, A9;
1780 NEXT K:PRINT #N,"":PRINT #N,""
1900 RETURN
10000 FOR I=1 TO 305:READ A$(I):NEXT I
10010 DATA guanju(11)グワンジュ@515##1234*5*
10020 DATA getan(22)カッタン*513#12*3**
10030 DATA Juan'er(33)カンシ"*514#12**34*

```

( 中 略 )

10350 DATA gufeng(31)ゴクフン%536#136\*245\*\*  
 10360 DATA shiwei(41)シヨクヒ" \*532#\*1\*2\*  
 10370 DATA maoqiu(21)カ" ヲキウ\*534#2\*134\*\*  
 10380 DATA jianxi(31)カンケイ@533#23\*1\*\*  
 10390 DATA quanshui(23)ケンスイ\*534#2\*13\*4\*  
 10400 DATA bomen(22)ホクモン\*533#12\*\*3\*

( 中 略 )

12510 DATA jiongzhuo(32)ケイシャク\*813#1\*\*23\*  
 12520 DATA quan'a(21)ケンア\*81A#36\*124579A\*8\*  
 12530 DATA minlao(22)ミンラウ\*815##124\*35\*  
 12540 DATA ban(3)カン\*818#234568\*17\*\*  
 12550 DATA dang(4)ダウ\*828#124578\*36\*\*  
 12560 DATA yi(4)ヨク\*82C#13579AC\*2468\*B\*

( 中 略 )

13010 DATA nuo(2)ダ" \*871##1\*\*  
 13020 DATA liezu(43)レツソ\*871##1\*\*  
 13030 DATA xuanniao(23)ケ" ンテウ\*871##1\*\*  
 13040 DATA changfa(21)チャウハツ\*877#3\*14567\*2\*  
 13050 DATA yinwu(13)インブ" \*876#35\*16\*24\*  
 15000 ON Z GOTO 15010,15020  
 15010 FOR I1=1 TO 37:READ A1\$(I1):NEXT I1:RETURN  
 15020 FOR I1=1 TO 37:READ A1\$(I1):NEXT I1  
 15030 DATA Zh=N,Sh=N,Bei,Yog,Uei,Wag,Zheg,Qi  
 15040 DATA Ngwei,Tag,Qin,Chen,Gúi,Cao  
 15050 DATA Bin,Lu,Lu,Nan,Nan,Hog,Hog,Jie,Jie  
 15060 DATA Gu,Gu,Fu,Fu,Yu,Yu  
 15070 DATA Wen,Shag,Dag,Qig,Chen,Min,Lu,Shag  
 15080 FOR I1=17 TO 29:READ A1\$(I1):NEXT I1  
 15090 DATA BoH,BoH,Toq,Toq,Qi,Qi,Xiao,Xiao  
 15100 DATA BoS,BoS,Sag,Sag,Du  
 15110 A\$(1)="guanju(11)クワンジュ@513###\*\*"  
 15120 A\$(38)="jianxi(31)カンケイ@534###\*\*"  
 15130 A\$(54)="zaichi(42)サイチ@544###\*\*"  
 15140 A\$(165)="famu(24)カ" ッホ" ク@663###\*\*"  
 15150 A\$(240)="sizhai(11)シサイ@805###\*\*"  
 15160 A\$(242)="lingtai(22)レイダ" イ@804###\*\*"  
 15170 A\$(246)="xingwei(23)カウイ" @814###\*\*"  
 15180 A\$(300)="bigong(41)ヒキウ@869###\*\*"  
 15190 RETURN